

島前合宿報告書

2015年8月22日から26日にかけて、島根県隠岐郡島前地域で研修合宿を行った。台風15号の接近により船が欠航となったため滞在は27日まで延びたが、研修、交流、観光ともにとても充実した日々となった。

1. 島前地域とは

島根県隠岐郡島前地域は西ノ島町・海士町・知夫村の3町村からなり、東京から約600kmの離島だ。現在の人口は約6000人、後鳥羽上皇や後醍醐天皇の配流の地としても知られており、歴史的にも有名である。また、島全体が世界ジオパークにも指定されているなど自然が豊かで観光名所も多く存在する。

2. 島前合宿とは

合宿を通しての目的は、①大学生が海士町（島前高校・ヒトツナギ部）の取り組みを見る、知る②西ノ島中学校の生徒の進路選択の視野を広げる③高校生（ヒトツナギ部）が地域の良さを知りそれを大学生が手伝う、というように定めた。また、企画を運営していく上での数値的目標として①次のプロジェクトリーダーを決める②1年生の参加を5人以上、と定めた。主な研修内容は、西ノ島町立西ノ島中学校における出前授業、島根県立隠岐島前高校におけるワークショップ、隠岐國学習センターでのワークショップの3つである。その他にも、島の自然を感じるための散策や、文化を体験する意味でもキンニャモニャ祭りという伝統的な夏祭りに参加をした。

研修先である島前地域には高校が1つ、中学校は各島に1つしかない。生徒のほとんどが高校卒業後の進路を明確にすることができないという現状がある。そのような中で、少し先に行く先輩として大学生の様子、進路決定の方法を伝えるために取り組んでいる。一方で、かつて深刻な人口減少、高齢化問題、高校廃校など日本の地方が抱える課題の先進地と呼ばれる場所であったこの場所の現在の様子、課題解決の最先端の町として知られるようになったプロジェクトについて学習する。実際に成果が表れている現場や政策を見ることで今後の大学での学習をより意義のあるものにできると考える。

3. ヒトツナギ部との交流

私が今回企画内容を決定する段階から、特に積極的に取り組んでいたのは、隠岐島前高校ヒトツナギ部との交流だ。ヒトツナギ部とは島前高校の部活動のひとつで、夏に行われるヒトツナギの旅に向けて企画・運営をしている。訪れた島外の中高生に、島前の魅力を

人とのつながりを通して体験してもらおうというのがこの旅の目的である。そのため島前の観光地には一切行かせないという徹底ぶりだ。交流会では、ヒトツナギ部の活動を支援してくださる地域の人を呼んで、地域の人や大学生の客観的な視点も踏まえて、今年度の旅を終えの反省を行った。私は、昨年島の島前合宿に参加した際に、ヒトツナギ部の活動を知った。昨年交流した時はちょうどその年の旅が終わったばかりで、来年度はこう改善したいという当時の1年生の声を聴いていたこともあり、その後どう進んでいったかというのとはとても気になっていた。また、高校生が地域について真剣に考える姿には学ぶことが多く、この企画には地域の方も多く関わってくださるのでその関係性や関わり方など刺激な点が多い。交流会の中でとても印象的だったのは、高校生が島についてとても詳しいことだ。部員のほとんどが島外から島留学という制度を使って入学してきた生徒だが、彼らは島事情をととても詳しく知っていた。それを他人にどう伝えるかは課題であると言っていたが、自分の住む場所に誇りを持つことは大切なことであると感じた。

4. 島前合宿を通して

私自身、島前地域を訪れるのは今回で3回目だった。1度目は昨年の夏のこの企画、2度目は昨年の冬に別の団体が企画するものに参加した。3度目の今回は参加者ではなく、運営メンバーの一員として関わった。昨年まで企画を担当していた先輩の思いを引き継ぐ形になるが、私自身にとっても大きな挑戦となり、自分の興味関心を確認する機会となった。企画は、今年の5月ごろから動き始めた。私に任された最初の大きな仕事は、参加者集めであった。特に、来年にまで継続的にこのプロジェクトを進めるために、1年生の参加者が必要だった。そのため、それぞれの基礎演習のお時間や授業の時間で宣伝をさせていただく機会をいただいた。参加者は無事集まり、目標にも設定していた1年生の参加者5人以上というのも達成することができた。次は、企画の内容を決めることだった。このような点に関して私は全くの知識がなかったので、2年生の運営メンバーや湯浅先生の力をお借りした。プロジェクトの進め方、チームビルディングなど新しいことを多く学んだ。ここで難しかったのは、先方のニーズと学生のニーズ、地域のニーズをうまく合わせることだった。この点に関しては他者からの客観的な評価が必要となるが、私自身大きく成長することができたと感じている。

今まで都市で暮らしてきたせいか、地域の様子を知ることは生活の様子、価値観、人とのつながりなど新鮮なことばかりですべてが魅力的に見えた。その中でも、人とのつながりという点では、地域の密接なコミュニティ独特のあり方を感じ、私が何度もこの地域を訪れる原因となったと思う。今回、島前地域を訪れて私自身今までと最も変化した点は、地域の方の中に知り合いが増えたことだと思う。前回訪れた時に交流した高校生が覚えていてくれたことや、お世話になった地域のおばさんが「また来てくれて、ありがとう。」と声を掛けてくださったことはとても嬉しかった。このようにしてつながりが増えていくことを実感できることは、かけがえのないことであると感じる。貴重な出会いとなった。

また、一番楽しみにしていたといっても過言ではない、キンニャモニャ祭りに参加できたことは本当に貴重な経験であった。8月22日到着した当日に参加したこのお祭りは、キンニャモニャ踊りという独特の伝統的な踊りがある。この島の人、誰もが踊れて、小学校でも踊りの練習があるという。盆踊りのように人々が神楽の周りを踊り、参加者は人と島外からも多くいるようで、チームごとに踊りを競い合う大きな行事だ。私たち大学生は、当日こちらにも視察に訪れていた京都造形大学の学生さんと一緒に参加させていただいた。子供からお年寄りまで参加し、とてもあたたかいものだった。

私が、この課題解決の最先端の町に行くことは、島民自身が自分のこととして危機感を感じ、何かしようという強い意志を持っていることだ。島が好きと言っているおばさんや、この島に来てよかったという高校生の声はそれを表している。それは島をよく知って、よく見ていて、誇りに思っているからこそ改善しようと考えていると感じたからだ。

この企画に取り組んで、様々な経験をする事ができた。私自身にとっても大きな成長となり、今までなんとなく地域系の内容を学習していきたくないと思っていた気持ちが固まった気がする。ある意味では、自分が卒業までに取り組んでいくことのきっかけとなる出来事であった。今後に向けて考えていきたいことは、様々な地域で似ている問題、課題が存在しているということだ。そしてその解決方法は時として応用して別の地域でも行うことができるということだ。そのままではなく、応用が必要というのは難しい部分であるが、隠岐島前高校の魅力化プロジェクトや公営塾、島外からの生徒の呼び込みというのは今や、島根県内や県外にも広がっている。また、私が現在所属している専門ゼミでも、コミュニティ・ビジネスやその発展について学習したが、それは不可能ではないことだと感じる。このような取り組みが今後期待されるのではないかと感じた。その担い手は、時としてその地域をよく知っている人が担い手となるか、また我々のような学生や外部の者が何かをすることができるかもしれないとも感じており、自分なりにできることを考えていきたい。またそのような発展、普及に期待していきたいと感じる。